

# 二葉亭と 明治時代

片岡 良一





# 二葉亭と明治時代



「僕には昔から何だか中心點が二つあつて、始終其二点の間を彷徨してゐるやうな氣がしたです。だから事に當つて何時も狐疑逡巡する、決着した所がない。」

支那に渡つて零落した「其面影」の主人公は、天津の宿で旧友葉村から「その意久地なさ」を責められた時、こう云つてそれを弁解している。彼が始絡其間を彷徨していた「二点」というのは、抑、何ういう「点」なので

あろうか。

「其面影」に於て、彼が最初にその意久地ない狐疑逡巡を示したのは、小夜子を渋谷家にやるかやらぬか、容易に決定しかねた際であつた。やりたくない気持とやつてはならぬ理由とをはっきり持っていないながら、彼は葉村に對してきつぱり断ることが出来なかつた。理由はその断つたことを義母や細君に知られると、養子としての彼の立場上甚だ面倒だ、というところにあつた。然も彼はその話を養母や細君にはきかせもせず、話さなくてもいい当の小夜子にきかせている。恋する気持のさせざる業以外、

其処には恐らく小夜子の拒絶を得て、やりたくない彼の  
気持への支柱を求めようとする、そんな気持が働いてい  
たのであろう。だから彼は、彼の知らぬ間に小夜子が承  
諾したときかされては、「最<sup>も</sup>う我力に及ばぬ」と「観念  
の眼は閉ぢても、無念さに腸の煮ゆる想ひ」をするので  
ある。

そういう形の狐疑逡巡は無論「其面影」の到る処に繰  
返し描かれているものであるけれども、その最も著しい  
現れは、彼が愈、離縁と覚悟して小夜子と小さな世帯を  
持ちながら、矢張り細君との間をきっぱり済算しきるこ

とは出来ず、結局小夜子にもその友達にも「未練」を疑われて、揚句の果に「御志の少し浅々しう仇めいたるがお怨みにて」など、書置されることになった条であろう。

「二点」の間に彷徨して徹底することを知らない態度は、葉村から「意久地がない」ときめつけられる以前に、夙く既に恋人の小夜子から、「浅々しう仇めいた」などと、愛想づかしめいた裁断を与えられているのである。

とすれば、此の二つの場合を通して認められる二つの中心点とは、果して何ういうものなのであろうか。

その一つは、云う迄もなく彼が、彼自身の気持に対し



て、相当粘り強い忠実さを持っている点であろう。小夜子を渋谷家にやりたくないと思えば、事情や義理がそれを話さねばならなくしている義母や妻にも、それらのことを承知しながら、終に話そうとはしない。知らぬ間に事が運べば、「腸の煮ゆる」程口惜しがりもする。第一義理ある細君母子を捨てて愛する小夜子との同棲にまでも突進んで行く。それは何と云っても自己の真実に忠実であろうとする、近代人の面影でなければなるまい。自己の本然と真実とに随って生きようとする近代人的立場を、彼はこうして相当はつきりと持っていたのである。

そうして、そう思って観れば、彼は決して気の弱い、自我の乏しいだけの人間ではなかつたのである。第一、細君や義母が白い眼をしていると知りながら、彼自身の好む職業以外の、何事にも手を染めようとはしていない。

その職業内での収入増加を細君が希望しても、その不必要を固く執って動かない。宇野浩二描くところの「枯木のある風景」の主人公が、細君の操るままに過重な負担にひしやげられて行った、あの自主性の無さなどは、それは格段の相違であろう。そういう彼であるからこそ、千葉に発とうとする小夜子を引止める辺りでは、相当強

くのしかかるような態度にも、容易になり得ているのである。そういう点から云えば、彼は何うして私の弱い、気の弱いどころの男ではない。彼が始終彷徨していた「二点」の一つは、無論此の相当程度に強かった自我への執着であり、その尊重とそれへの誠実さであった。

が、そういう彼であるに拘らず、彼は結局その自我をも自我に対する誠実をも強く生き通してはいなかった。その理由は、上記二例の場合では、詮ずるところ義理ある養子としての立場への顧慮であり、既存の結婚生活と家庭関係とを破壊しきれない拘泥であった。其処に無論

彷徨する第二の「点」が見出される訳だろう。それらは無論単純にむき出しの形に於て描かれているのではなかつた。前者には嫉妬を煩さがる主我的な感情が絡みついて居り、後者には自分が見棄てた後の細君母子の生活に對する惻隱の情が柔い翳りを与えている。のみならず、それらは屢々第一の立場と絡み合つて、容易には割切れぬ複雑な外貌をさえ呈している。

「哲也にすれば、公債代りに貰はれた身と思へば、左程大恩を受けたとも思へぬけれど、隱居の言ふ通り、今棄てたら母子は路頭に迷ふ、厄介な人達では

あるけれど、正可其そん様な目にも合はせたくない。といふと、何とやら慈悲なさけらしく聞えやうが、慈悲でも何でもなく、只氣が弱くて其様な酷たらしい事は出来ぬといふ點が有る。」

思に拘泥る義理の情と、細君母子への惻隱の情と、何事も自己から割出して行こうとする主我的な情とが、濃淡の差こそあれ、兎に角複雑に混り合っているのであることが、容易に承認出来るだろう。「酷たらしい事は出来ぬといふ點がある」のだから、他の理由も多少ずつは肯定されねばならぬものになる筈だし、「左程……とも思

へぬ」心が、幾らかの拘泥を残しているのであることも、云うまでもなからうから。というように、それらは決して概念的な単純さを以て現れているものではないけれども、然しそれらがそうした複雑な翳を帯びて現れるというのも、つまりはその養子としての立場への顧慮や家庭生活乃至結婚関係を破壊し得ないところなどから、強く自我を生き得なくされている者の、弱々しくされた心の動きが、其処に影さしているからのごとくに過ぎないのだと思う。だからその複雑さは、此の第二の「点」と第一の「点」とのいろいろに絡み合うところに生ずる翳なの

であつて、それによつて第二の「点」の概念的な把握を拒絶し得るものとはならぬのである。「其面影」の主人公の彷徨した第二の「点」は、だから当然義理を重んじ、既存の秩序と形式とに拘泥らずにはいられない、云わば第一の「点」とは真反対に対立するものであつたことになるのだ。彼はそうした対立する「二点」の間に彷徨して、その何れにも徹して行かなかつたからこそ、意久地なく中途半端でもあれば、煮えきらぬ不決断さに青白んでもいなければならなかつたのだ。

そういう彼に比すると、「其處へ行つちや小夜だ。所

謂外柔内剛で、口當りは一寸柔いが、心が確りしんしてゐる、行き出すと極端まで行るです」などと書かれてはいるだけ、小夜子は余程自分の意志に従つて行動している。或時の彼女は、聴き分くべくもない姉に向つて敢然たる忠告をも試みている。両国の宿で哲也に許す条の如き、迫るのは彼であつても、強く心に構しんえているのは彼女だつた。兄妹の倫理を紊るのを怖れる彼女は、彼をして兄妹でなくなることを誓わせ、彼の愛が許すに足る程熾烈なものであることを確かめてから、はじめてその唇を許しているのである。だから彼女は、彼に細君への未練が残



されていると観るや、死を迫ることによって彼を彼女への愛に殉じさせようとした。彼がそれを逡巡するや、敢えて姿を晦まして彼女一人の道に首途して了った。そういう彼女に、弱くもない自我を生き通そうともせぬ不徹底な哲也が、「志の淺々しう仇めいたる男」と見えたのも、恐らく当然であつたろう。同じ時代の子であつても、集団的な社会生活を持たぬ女は、男にはつきものの其処から来る左顧右眄性を持たず、それだけ純粹な我に立籠る場合も多いわけであろう。女が屢々事理の弁別を欠いた、只管な我や感情の強さに生きるのも、無論其処に所

縁した現象なのだ。そういう関係が、哲也のような男を生れさせた時代に、こうした小夜子のような型を目につき易い存在ともしたのであろう。が、それは兎に角、こうして自主的に強く自我を生き通そうとする女を描いて、人間解放時代の新しい女性の型を、少くとも或る程度まで仕上げて見せたところにも、二葉亭の功績の一つはあつた訳だと思う。寡聞の故か、哲也の型を描いた功績ばかりが大きく称えられているかに思われるので、そんなことも一応付け加えて置きたいと思うのである。それは「うき雲」の場合にも同断で、文三の世界を描いた

功績は、お勢のような型を描いて、彼女が折角新時代の女性らしい風貌を持ちながら、それが文三の主我主義同様、正しい根のない虚飾的粉黛に過ぎぬものとして、嗤笑的に観られなければならなかつたばかりか、此処には小夜子の場合とは逆に、依存者的な生活に慣らされた女性の、それ故に何うにでも変り易くなっている無性格さが遺憾なく剔出されて、それが上記虚飾的粉黛の虚飾性に倍加された著しさを持たせながら、実は二様の問題を提示していたのと、或る意味ではさまで軒輊するものではなかつたのだ。文三を描いた功績が称えらるべきであ

つたら、お勢のような型を描いた功績も、だからまた或る程度には重視さるべき筈なのだ。それは男性への依存関係という特殊なものを引摺っているだけに、それのない文三の場合より、或はより複雑な問題を孕んでいても云えるかも知れないのだ。文三の問題に疑惑と憂悶とを感じている著者が、彼女には多く嗤笑と蔑視とを向けているのは、またそれとは別個の注意さるべき観点であるけれども、そうした作者の受取り方の問題などとは離れて、そうした題材の反映するものの意義も、十分考えられていいのだと思う。

が、それは此処では些か無用の寄り道への深入りだった。再び本筋に帰るとして、「其面影」の主人公が始終その間に彷徨を続けていた「二点」が、上記の通り自我に忠実であろうとする気持と、そうした気持を弱める既存の秩序や道義に拘泥する態度とにあったとすれば、それは何も「其面影」の主人公にのみ観られる特殊な現象なのではなく、謂うところの近代主義が、歪められた畸形児として半産させられた、明治時代一般のものであったことが、極めて容易に知られるだろう。新しい世の中の組織が官僚の指導によって組上げられ、随って民権運

動が半産して、半封建的な官僚的国家主義が打樹てられた明治時代は、その社会機構の必然から、主我的な人間主義をも時代一般の潮流としながら、然も其の思想に生きる者を、「頑固」とか「片意地」とか「偏屈」とか、その他等々の称呼で称び慣らすような、そうした考え方をより一般的なものとしていたのだった。自己の感情と信念とに忠実であった「うき雲」の文三も、叔母のお政からその「頑固」<sup>かたいじ</sup>を責められていた通り。其処には、「殿様風という事がキツイお嫌ひ」で、然も「御自分は評判の気六ヶ敷屋」の、「言わば自由主義の厭制家といふ御

方」などが、社会の到る処に蟠踞してもいたのだ。主我的な人間主義者は、彼等がそう称ばれていた通りの、片意地な偏屈者にもならざるを得なかつたであろう。明治という時代は、そういう時代であつた。そういう時代に生きる人々が、「其面影」の主人公のように、対立する二点の間に彷徨して、割切れぬ不徹底さに、浮草のような不安定な生を托していたのも、寧ろ必然であつたのである。だからそれは、「其面影」の場合にも、その主人公にのみ認められた現象なのではなく、極めてありふれた型の細君時子などにも、或る程度共通していたものだ

った。彼女は夫の意に反して自由に寄席などへ出かける一種の自主性——少くとも解放された女らしい生活を持つていた。然もそれを、母への孝行という既成道德によつて、カムフラージしようとする中途半端さに止まっていた。夫の権威は無視する近代女性が、母の権威への適従を名として、責任回避をしようとする非自主性に——と云つて仰山なら旧時代型の女性に、同時にこんななり得ているのである。そういう彼女だから、「此様な亭主をへいくと崇め奉るのは馬鹿らしくて出来ぬけれど、去迎棄てられては大變と」思っている。時には「嫌はれる



筈がない」と思っている。一度結ばれた夫婦関係の絶対を信じて疑わないのである。それは無論主人公の場合とは相当異ったものであったに相違ない。彼は上記のような「二点」の間に彷徨する自分を意識して、割切れぬ自分の世界を自ら持て余している。寧ろ不徹底な自分に自己嫌悪をさえ感じている。例えば小夜子を渋谷家にやつてはならぬことを、十分「承知で看すく其厭な話を取次がなければならぬ」吾が身の「腑甲斐なさ」に、「何に譬へようもない」嫌悪を感じているというように。尤もそのすぐ後で、「あゝ、其それにつけても、養子なんぞに

成るものでない」などと嘆息して、それを養子としての弱みに託けて弁解しようとする狡さをも示しているけれども——それだけその自己嫌悪も徹底したものにはなり得ていないけれども、兎に角そうした自己嫌悪などを感じているだけ、彼には良心的な苦悶がある。じき弁解を考えながらも、兎に角自己の感情や判断に忠実であり得ず、随って誠実でない自己を鞭とうとする気持がある。のに対して、時子にはそうした意味での反省や自己嫌悪はない。だから対立する両極のそれぞれから、自己に利益のある都合のいいものだけを取集めて、その中で無反

省にふくらみ返っていようとする不純さが著しい。彼女自身の倫理はあつても、近代人としての良心も知覚もないのである。それだけ主人公とは性の合はない、縁なき衆生である訳なのだが、然もそういう彼女なりに、矢張り対立する「二点」の間に彷徨するものとしての苦悩や気弱さは、或る程度持っているのである。流石に主人公はその点に正しく触れて、冒頭に引用した葉村への弁解の後に、

「時も鼻張りが強いばかりで、卒いざとなると存外弱い」と、附加えることを忘れていないのだった。其処に主人

公の彼女に対する同類意識が、端的に窺われる訳だろう。自ら意識して苦悶すると否との相違はあっても——そうしてその相違は人間評価へのかなり重要な標準となり得るものではあっても、それが時代全般に涉つての特質である以上、そうした客観的には結局同質の現象が、誰の場合にも現れることの重大さより、より重要なものとは云えないのだ。良心的な知識人である筈の主人公の場合にも、その良心的な苦悶に直ぐ続いて、養子としての制約に弁解を見出そうとするような、不純な非良心性が覗いていたではないか。それは時子が、夫を無視する放縱

さの弁解を、母への孝行という既成道德の枠の中に見出して、決して別様の現れではなかったのだ。その意味では、彼女も決して主人公と縁なき衆生でばかりあつたのではなかったのだと思う。

そういう観方をすれば、さき程の寄り道には、主人公とは相当対比的な、自主的な強さに生きていると説明した小夜子にしても、矢張り或る程度等類の苦悩や気弱さに陥っているのであることが、容易に肯定されよう。彼女程に強く自主的な女も、渋谷家への住込みについては、周囲の事情や義理を顧慮して、彼女自身の本心とはまる

で反対の行動にと、進むことを余儀なくされている。然もそうした行動への彼女としての最後の意志は、「兄さんさへ御承知なら」と、顧みて他を云う形の、そんな弱さに傾いているのである。それは主人公が、「二点」の間に彷徨して彼自身の意志を決定出来ぬままに、暗に彼女からの支柱を求めようとしたのと、完全に同じ態度、同じ気持の現れと云えよう。彼女が主人公の細君への未練を思い、彼を征服しきることの不可能さを考えた時、一応は死を思い、再応は自ら退いて、現実的葛藤の圏外に逸脱し去ったのも、一応は自我を生きようとする自主

的態度の貫徹であつたものの、それが飽く迄も強い自我主義者の道ではなかつたことも、亦観易いところだろう。況して其処には、友人によつて説き勧められた、罪の意識と姉の家庭の円満を計ろうとする気持とが、有力な動機となつていたに於てをや。だから彼女は、自ら捨去つた筈の主人公の支那行を、人知れず見送るといふ奇妙な矛盾にも、何時の間にか落込んでいたのである。主人公の哲也には、まるで別の世界の住民であるかと思わせる程の驚嘆を与えた彼女も、こうして結局は彼にとつての異邦人でも何でもなかつたのである。それが明治という

時代の人間の背負わされた、宿命的な弱さ不徹底さであり、性格の型であつたのである以上、そうして一見対蹠的に見える程の二人の間に、そうした等類の現象が認められるのも、矢張り当然なことであつたのであろう。時子は無自覚に、哲也は意識して苦しめられながら、小夜子はそれを乗越えたつもりで矢張り脱却しきれぬものの影をひき摺りながら、彼等は結局同じ重荷に喘いでいる弱い羊達に過ぎなかつたのである。小夜子が哲也の「淺々しう仇めいたる」を難じているのなど、だから今日の眼から観れば、所謂日糞が鼻糞を嗤うだけのもの、結局そ



の母親などと同じ愚劣さに住りながら、新時代の知識婦人を鼻にかけたお勢の浮薄な衒気などとも、それはまるで無縁の現象でもなかったのであることなどが、考えられるのではないかと思う。

こう云う些か極端な感じであるかも知れないけれども、兎に角以上のように観て来ると、二葉亭は「其面影」に於て、以上のような等類の人物を巴に絡ませ、其処に様々な濃淡と陰翳とを持たせながら、主我的な人間主義とそれと対立する形式主義規範主義との、相互に融合牽制し合う形を描いて、そうした融合と相互的な牽制との

故に生ずる、明治時代の徴温的に低調化された空気を髣髴させたのであつたと、云うことが出来る訳だろう。それは素より「其面影」だけの世界であつたのではなかつた。彼の出世作「うき雲」の如きも完全に同じ種類の作品だつた。その主人公文三が、周知の通り、完全に哲也と同一タイプであつたことだけでも、それを想わせるには足ろう。彼も亦叔母にその「頭固」を咎められる程、彼自身の信念と衷情とに誠実な男であつた。然もその信念も誠実も、何時も根のない気弱さと結びついていた。そういう彼の周囲に繰りひろげられた「うき雲」の世界

が、「其面影」のそれと完全に相似たものであることも、恐らくその作を読まぬでも推定されようと思う。寧ろそれは、そういう世界の消息を、明治二十年という夙い時代に、端的に捉えて見せたところに、その作品としての価値が高く認められるものでさえあったのだ。それが明治時代全般に通じての時代的な現象であったのであり、民権運動の半産した二十年前後の明治新社会成立期が、それをまず捉えさすべき最初の好契機であったことは、無論認められなければならぬけれども、それにしても、明治新文学の暁鐘と云われる「小説神髓」が、あれ程の

混沌を孕んで出たばかりの時代に、そうした明治期としての最も根本的な問題に正しく触れた作品を提示したということとは、実際驚くべき先駆的な業績だったのと思う。それは成立と同時に捉えられた新しい社会現象であったとも云えるのだから。

そういう先駆的な業績が、他の作家によって成就されず、二葉亭によって成就されたというのは、云う迄もなく彼が、ベリンスキイその他の近代写実主義理論に教えられ、ツルゲネフやゴーゴリ等のロシア文学に示唆されたからに他ならなかったし、其処から彼が抱いて来た文

学観が——というより彼自身の文学に対する要求が、当時の文学者一般が懐いていた趣味的愛翫的なそれとは、著しく異なるものであったからに他ならなかつたことは、既に誰でも知っている。「予が半生の懺悔」にも

「私のは、普通の文學者的に文學を愛好したといふんぢやない。寧ろロシアの文學者が取扱ふ問題、即ち社會現象——（中略）——を文學上から觀察し、解剖し、豫見したりするのが非常に趣味のあることとなつたのである。」

と、当時の要求を説明している二葉亭は、同時にまたそ

れが、「人間の運命とか何とか彼とかいふ哲學的」な問題に対する関心、それも純粹に哲學的なのではなく、「寧ろ文明批評とでも」云うべきものへの要求であったことをも、明かにしている。それがそうした社会問題的な、文明批評的なものへの要求から生れたものであったからこそ、鼻のさきにぶら下っていながら当時の文学者達には全然見えなかった上記のような問題が、逸速く関心されることにもなったのだ。文学革命を文学理論の範囲内でのみ成就しようとした「小説神髓」が、あのような混沌と中途半端な効果とをしか遺さなかった時に、二葉亭

の作品があれ程の革新を成就し得たのを思えば、文学の革新ということも、単に直接的な文学への関心からのみ達成されるものでないことが、知られるのではないかと思う。兎もすれば文学を否定しようとし、少くともそれを軽視しようとした二葉亭によって、正しく新しい時代の文学が先駆されたということの示唆が、それこそ正しく汲取られねばならぬのだ。明治文学は、彼によって、はじめて直接に生きた人生と交渉するものとされたのであったのだから。それはまたそういう新しい文学性への要求が、明治社会の持った根本的な問題を、文学の中に

領略することとなったのだとも云うことが出来るけれども。

と同時に、彼がそうして問題提示に成功したのも一つの理由として、彼自身も云っていた通りの、徹底的な懷疑派であったこと、内省の誠実さを持っていたことなども、注意されねばなるまい。誠実さなどと云おうとするのは無論ない。二葉亭がその生涯を通じて懷疑し通した人間だったと断定しようとするのでもない。それどころか、彼はその作「平凡」に於ては少くとも一応その懷疑を棄てようとしている。必しも懷疑し通したのではなくて、



云換えれば懷疑への明確な解答を擲み得たのではなくて、然も懷疑を邈出しようとする形を示しているのだ。其処にも彼の負わせられた時代的制約があつたのだが、兎に角彼は、矢張り時代の子としての必然から、哲也や文三と同じように、相当強い自我を持っていた。所謂お祖母さん子として、両親にも余り抑えられずに育つたという生い立ちなどが、そうした時代人的な私の強さを、一層著しいものにしたのであろう。その強さが、彼をして一面よくその信ずるところに遵わしめて、さてこそ伝統文学革新の横紙破りをも敢てさせれば、言文一致の完

成をも成就させたのであった。伝統文学の約束に遵わず、自分好みの作品を作り上げる、伝統的な美文表現を破壊して、自己本来の言葉と文脈とによる文章を打樹てる、それが彼の成就した文学上の業績だったのだ。だから彼の仕事は、自我の持つ要求を誠実に生かそうとする、そういう性質の上に成立ったものであったと云えるのだ。従って彼の場合、自我の強さは即ち誠実の濃さであった。然も彼は、反面、そういう誠実の塊りであった自分の仕事に、自信を持つことが出来なかった。言文一致を成就して逍遙に褒められた時さえ、何か見当のつかない気味

悪さのようなものを感じていた。つまり彼にもそれだけ旧い世間の文学が残っていたのだ。逍遙より勝れた近代文学を作り得ただけ、新しい自我へのより密度濃い誠実さを持ちながら、逍遙の頭が肯定するものをさえその儘には同感することが出来なかった程の旧さを、彼の意識は孕んでいたのだ。文三の運命には不安と疑懼とを感じながら、お勢の新時代的な風貌には多く反感を寄せていたのは、無論そうした意識のさせたことであつた。「予が半生の懺悔」に次のようなことが書かれている。

「私は當時『正直』の二字を理想として、俯仰天地

に愧ぢざる生活をしたといふ考へを有つてゐた。

この『正直』たる思想は露文學から養はれた點もあるが、もつと大關係のあるのは、私が受けた儒教の感化である。(中略)。つまり東洋の儒教的感化と露文學やら西洋哲學やらの感化とが結合つて、それに社會主義の影響もあつて、こゝに、私の道德的の中心觀念、即俯仰天地に愧ぢざる正直が形づくられたのだ。」

今日から観ると、これは随分奇妙な思想の合成酒だろう。ロシア文學から養われた「正直」への傾情というものは、

云う迄もなく人性の自然と眞実への誠実さを尙もうとするものである筈だ。それが色濃い程度に於て二葉亭のものであったことは、既に観て来た通りなのだから、彼が「正直」を最高のモラルとした必然は容易に理解される。が、儒教思想というものは、その現実主義的な性格故に、或る時期にはそうした人性尊重主義と緊密に結び合つたこともあつたけれども、その時代を過ぎた後には、それは只管形式主義的な、規範主義的なものと化し去つて、人性の自然や眞実の尊重とは多く背馳するものになつていたのであることも、恐らく周知のことだろう。現に二

葉亭の考えていた儒教主義が、一面そういう形式主義的規範主義的なものであつたことは、上記引用文中略の部分などにも明かにされているのである。それを彼は、その本来相互的に対立する筈のものを、無雑作に結びつけているのだ。「其面影」の主人公が持っていた二つの「中心点」、即ち対蹠する二つの思想軸は、こうして果然作者二葉亭のものでもあり、それが時代的宿命的なものであるが故に、矢張り「其面影」の主人公の場合同様、整理されない混沌として、彼の中にも蔵されていたのだ。それは彼が誠実に「正直」であろうとすればする程、当

然その本来的な矛盾性を際立たせて、彼を苦しめずには  
いなかっただけのものであろう。然も、前にも云った通り、自  
我への誠実さも逍遙などの場合より濃く、対蹠的方向へ  
の拘泥も亦彼より強いというような、つまり巾広く激し  
い性格であっただけに、その矛盾相剋の程度も著しく、  
苦悶の振幅も大きくなければならなかつた筈なのだ。自  
ら「骨に彫り肉を刻む」と云っていた程の刻苦を尽して  
「うき雲」などを成就しながら、他面兎もすれば文学を  
蔑視し否定しようとしたような激動も、つまるところは  
其処から生れて来たものであつたのだ。それは突詰めて

行けば結局懊惱と所謂自意識の過剰と行動性の減退とを結果すべき筈のもの、「其面影」の主人公がそうした結果に押しつけられて、煮えきらない意久地なしとなって行ったのと同じように、彼も亦自ら「私は懷疑派だ」と云わずにはいられなかつた程の押詰められた懷疑派であり、あれ程の才能と熱情とは持ちながら、何れの方面にもその情熱と才能とを揮灑し尽す程の、渾成された、安住的な仕事は遺さず、彷徨的な生涯を畢らねばならなかつたのだ。だからこそ彼の場合には、懷疑することが即ち誠実だったのであり、「私は懷疑派だ」と宣言する迄



懷疑に生きたことが、明治時代人としての彼の宿命を、最も突詰めた形に於て生きたことにもなるのであった。

そうして、そういう彼であったのだから、「其面影」や「うき雲」の問題は彼の外部にあつたばかりでなく、同時に彼の内部の問題でもあつたのだ。「うき雲」や「其面影」が、単なる観察や写実主義の理論だけの産物でなく、そうして主体化された苦悶の象徴であつたが故に、それらは単なる文明批評以上の、迫力とそうした時代に住むものの焦躁的な不安や絶望などを、伝え得る作品となつたのだ。云わばそれが文学の効果であり、文学は

そうした効果から発足して生の正しい方向への示唆なり誘導なりと結びついて行く筈のものなのだから、それらの作品を生んだ此の理由も、軽視することを許されまいと思うのである。ロシア文学の示唆や文明批評への要求と併せて、も一つ二葉亭の懷疑や誠実な内省を重視せねばならぬと考える所以であり、そうした懷疑や内省が、時代の最も根本的な問題を、重苦しく複雑な感動を罩めて、然も的確に正面に押出して見せる作品となった程、明治という時代を突詰めて生きた二葉亭の偉大さが考えられねばならぬのだと思う。それ程深く突詰めて時代を

生きた人が、あれ程の漂蕩を続けて、安住的な結論を得きらなかったところに、明治という時代の不幸があったのだ。尤も、それは単に暦の上の明治時代だけのことでなく、大正時代は云う迄もなく、それを経た昭和の今日にも、なお明確には解決されない、不幸の尾をひいているものではあるけれども。

その位だから、二葉亭の苦悩や懷疑も、結局明確な解答を与えられなかったのだけけれども。と云って彼の懷疑や思索が、上記のような問題とその未解決とに定着して、始めから終りまで、一つところに澱んでばかりいたので

もなかった。「うき雲」の場合には、彼の懷疑や苦惱は流石に生ま生ましく泡立っていた。自意識の鋭い人間にあり勝ちのはにかみとそれを被おうとする一種の反射的な姿勢と、そうした姿勢と結びついた残滓的戯作調とが、兎もすればそれを被い消そうとはしていたけれども、そんなものでは消し切れない泡立ちが、其処に示された作者の心境に、絶望とか諦観とかいう言葉では規定し得ぬもののあるのを、判然と示していたのだ。それは一種の怖れであり、憤りであり、与えられた問題の生ま生ましさに對する激動であり、それらのものの絡み合った重苦

しさであつた。だからそれが積極的に凝つては、問題を  
乗越えた明るい希望に縋りつこうとする気持ともなつて  
いた。意久地なしの標本のよう描かれた文三は、すべ  
ての方面に破綻が来た後の作の結末に於て、却つて極め  
て執拗な強さに生きてゐるではないか。出て行けがしの  
叔母には或る程度無関心に、そむき去つたお勢とも離れ  
ながら、然も彼女を一時の病氣と観じて、静に彼女を救  
うべき時期の来るのを覗う——其処に本然と眞実とを生  
きようとする文三的なモラルの達成にかけられた微な希  
望（未練）が、残されてゐるのではないか。問題を問題

として諦視しながら、なおよき解決を所期しようとする作者の若い情熱が、其処に漂っているのではないか。

それが、略二十年を距てた「其面影」になると、同じ問題に対する絶望的な気持が、ぐっと色濃くなっている。主人公を細君の時子と同類視して、救うにたえぬものとしている辺りなど、殊にその感が深いだろう。其処には小夜子のような女を点出して、自主的に生きる者の道を辿ってはいるけれども、それが決して強く定かな落着きに向わぬところに、矢張り作者の気組の銷磨が観じられていいのであろう。「うき雲」の結末に於て、文三によ

るお勢の救出を策した作者は、終に実際の救出には筆をつけなかった。そうして二十年を距てた後に、お勢に当る細君ではなく、文三其人に当る哲也を、救い難い性格破産のどん底に突落した。怖れと不安と憤りと希望との間に動揺を続けていた作者の若さが、それだけ老いた絶望に沈んだのではないか。

果然「其面影」に続いて書かれた「平凡」には、「うき雲」以来の此の問題を一応放棄した作者の相が認められる。「私は懐疑派だ」の中で、「平凡」の製作動機を説明した作者は、それが「人間そのものではなくて、人

間が人生に對する態度」を問題にしようとしたものだったと、云っている。その意味は、人間の運命と歸趨とが問題ではなくなつて、人生に処する人間の生き方が問題になつて来た、ということであろう。此処まで来て二葉亭には、人生はもう問題にするに足るものではなくなつたのだ。所謂それはもう解つて了つたのだ。「うき雲」に於て、あれ程の問題を觀、あれ程の不安や憤りに彷徨していた人が、同じ問題を追及した「其面影」の絶望を経て、そうしてこのように人生が解つたと考えたとしたら、それはただ解つただけのことであつて、問題が解決



されたことを意味しはしないだろう。然もその解り方が、時子と哲也の場合と同様、厳しく拘泥る者も、そうでない平凡な者も、結局は同類以上に出られない人生なのだという、その程度のものであったのだ。尤も、それは観察としては正しいのだ。人間観察を帰納して得られる究極的な人生観でさえあるのだ。が、其処から出発して、だから厳しく人生に拘泥る者より、はじめから問題のない平凡人が方がいいのだとしたら、それは何ういうことになるのだ。事実また二葉亭はそう考えて、平凡な人間や平凡な世界のおさを、此作では繰返し描こうとしてい

るのだ。主我的人間主義者である文士の「理想」など、「いつも人に迷惑を懸けるばかりで、一向自分の足しになつたことがなく、随つてそんなものより平凡人の世間哲学の含蓄の方が、余つ程ありがたい、人生問題より寧ろ一匹の小犬の方が——それに拘泥する心の方が、ずっと深い意味があるのだ、というようなことが、あの作には繰返し書かれていたではないか。お勢やお政よりも文三を高く評価した「うき雲」の作者は、哲也を時子と同類視した「其面影」を経て、こうして逆に文三的哲也的な文士などより、平凡人と彼等の世界とを高く評価し

ようとする人になって来たのだ。それは平凡直截を尚ぶという点で、一見如何にも人間主義や自然性尊重の到達した最後の境地らしくも思われるし、流石にまだ時代として若かった明治初期に生い立った二葉亭の積極的な行動性が、考え追究するばかりで行動性を喪って了ったインテリ型よりも、考えずに行動して行く凡人型に心惹かれた必然も、よく理解されるけれども、それは所詮は当時としての人生観察が、その最後の壁に突当って、それを正しく突破することが出来ぬままに、其処からまた未解決な人生に引返して、然も一切の問題を放棄して、

問題のない無風帯にと沈湎しようとしたただけのものであったに過ぎぬことは、此処に今更縷説する迄もあるまい。二葉亭にすれば、それは却って一時の激情的な表白であったかも知れない。動揺する心の振幅の、その一極端にあつたものであつたかも知れない。此処にそれを縷説する余裕がないが、「平凡」にはそれを思わせるアイロニカルな節々も少くない。だからこそ彼は、作品「平凡」にも満足せず、「平凡」の境地にも安住出来ず、残りの短い生涯を、其処に書かれたとは余程異つた方向に、進めて行つたのでもあろうけれども、それにしても彼が、

自己の懷疑の十分な解決を見出すことなく、よしじりじりした憤激（自虐）の気持からにもせよ、一種の諦觀的な方向にとずれようとする傾きをも時に示したのであったことは、否定すべくもあるまい。前に、二葉亭が必しもその懷疑を懷疑し通したと断言することも出来ない、彼にも亦解決する代りに高く邈出しようとする傾きもあったと書いたのは、無論此点を考えていたからだ。懷疑から絶望へ、絶望から諦悟へ——彼の三つの作品は、少くともこうした心境の発展を語っているのだ。

だが、此処まで来て考えてみれば、誰が二葉亭の提示

したような問題に触れて、諦悟以外の解決に向って行ったのか。無い。少くとも二葉亭と相前後した時代の作家には、そういう人は無かったであろう。それが彼等を圍繞する社会組織の根本に連る問題であっただけに、社会を突放して究明する方法が提示される迄は、その問題は不可解な謎のまま残されて、随って光を求めらるる当年の人々の心は、そうした問題の究明を棄てて、そうした問題を孕んだままの人生に、如何に処すべきかを考えて行かざるを得なかつたのだ。自然主義以後の文学が、總括的に「人生とは何か」の問題（写実主義）を離れて、「如

何に生くべきか」の新現実主義的方向に傾いたことは、恐らく誰も知っていよう。そうしてそうした「如何に生くべきか」についての提唱の中に、「凡人浄土」や「片隅の幸福」などを称える凡人主義が、一つの大きな流れをなしていたことも。つまりそれが、二葉亭の探求したような明治世相に処するものの、一つの究極的な態度になつていたので。其処に安住はしなかつたけれども、二葉亭の大きな苦悩の振幅は、矛盾する両極（「二点」）からの二等辺三角形の頂点として、そういう態度を考えようとするところにも行っていたのだ。だから彼の作品は、

その代表的なものは此処に触れた僅か三作に過ぎなかつたけれども、それによって、明治文学全般を貫く一筋主要な展開の跡を、髣髴せるものにもなっているのだ。人間の尊重や自然性の尊重をその思想的根柢としながら、その円満な達成を阻まれていたが故に、著しく悲觀的な色調を帯びていた浪漫主義から、その執拗な人生探求によって絶望に突当った自然主義を経て、新浪漫主義以後総括的に新現実主義的な生の態度の工夫にと発展して行った明治文学の枢軸は、憂悶や怖れや憤りから絶望を経て諦悟的な生き方の推重にと進もうとした二葉亭の三



作に示された境地の発展と、殆ど完全に同軌ではないか。それを極端に云えば、明治文学は、一足さきに二葉亭が進んで行った軌道を、後から後からと追って行ったものと、云うことも出来るのではないか。最も夙く、且つ正しく明治社会の根本問題に触れたが故に、二葉亭はまた最も夙くそうした明治文学発展のコースを辿ることもなったのであろう。然も、そうしたコースの最後のな帰着点であった「平凡」の境地に、自ら満足することの出来ないものをも残していた二葉亭には、そうした一般的展開の型を越えて、もっと積極的に生きようとする意

欲もあつた訳だ。その逞しさが正しく方向づけられて、彼がその後第四の作品を発表したとしたら、それが何んな新コースを開拓したであろうか、今となつてはもう空しい期待をも感じさせるのではないかと思う。

が、それが、或る意味で明治精神の全局を——と云つて不可ければ、明治精神として一つの渾成された全体であつたものを、強く生きたものである以上、そうした期待は、よし第四の作品が出て、矢張り満されないことであつたかも知れない。そう云わせるだけ、二葉亭は明治時代を深く生ききつたとも云えるのだ。とすれば、そ

うして深く生ききった人が、それにも拘らず十分な最後の安住境を見出し得なかつたところに、繰返して云う、明治時代の最も大きな不幸があつたのだ。そうしてそれが今日にもなお尾をひいているが故に、二葉亭は今日の人々にも矢張り意味のある作家となつて思ふのだと思う。

(昭和十二年九月『文学』)



日本文学電子図書館

---

## 二葉亭と明治時代

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

底 本：「近代日本の作家と作品」

岩波書店

昭和14年11月10日 印 刷

昭和14年11月17日 第1刷発行

日本文学電子図書館